



まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

関西元気企業

～国境のない介護を求めて～

超高齢化社会が叫ばれる昨今。喉から手が出るほど、介護の担い手が社会から求められています。その一方で、日本の介護施設で働きたいが、なかなか働く場が見つからないという外国人の方が多く存在します。介護者のために働きたいという外国人の想いと社会のニーズを結びつけることはできないものか。

その想いを実践するアクシ株式会社の元地社長に起業のきっかけや経営理念をお聞きしました。

企業情報

名称	アクシ株式会社		
所在地	神戸市灘区高德町1丁目2-13		
設立	2008年	代表者	元地 裕子
従業員	45名	資本金	33百万円
H P	http://www.axcy.jp/		

●起業前は何か仕事をされていたのですか。

夫が経営する自動車販売会社の経理を手伝っていました。その後、夫との離婚を機に、大手派遣会社に就職。そこでは、営業職として100人以上の派遣社員の担当を任されました。担当する派遣社員は、質の高い技術や専門的な技能を持った方が多く含まれており、「こういう人たちの持っている技能を十分に生かしてあげたい」、「企業ニーズとうまくマッチングさせたい」など、日々考えながらの仕事に非常にやりがいを感じていました。大げさかもわかりませんが、派遣先の

企業や派遣社員から感謝の声を聞くことは、私にとっての最高の喜びであり、同時に生きがいにもなっていたと思います。私は、この仕事をやればやるほど、もっと、もっと社会の役に立ちたいという熱い想いがこみ上げてくるのを感じていました。



アクシ株式会社 元地裕子社長

●どうして、介護の世界に入ったのですか。

ある時、祖母の介護でお世話になっている医療法人の理事長とお話をする機会があり、現場での介護職員の離職率の高さと慢性的な人手不足を知りました。

また、一方で、日本人と結婚して永住権を持った外国人の方が望んでも介護の仕事に就けないという現実を知りました。

特に、フィリピンでは、大家族の生活で年長者を敬うという文化が根付いており、介護の仕事は、現地でもステータスの高い、憧れの職業だということが分かったのです。

日本で介護の仕事がしたいにもかかわらず、そのチャンスにも恵まれない外国人の方々のため、またこの国の未来のために、外国人介護士と施設を繋ぐ役割が必要だということを感じ、前職を辞

め、起業することを決意したのです。

でも、今、振り返ってみると、決して一人では起業できなかつたと思っています。起業に至るまでの過程で、多くの人々の支えがありました。神戸市が主催する創業塾で偶然出会った山田さんもその一人です。山田さんは、私にはない外国人受入れのノウハウを持っていて、在留資格の確認などを手伝ってくれました。彼は、今でも当社マネージャーとして、私を助けてくれています。

また、資金面は、介護の現場を私に教えてくれた医療法人の理事長に助けられました。自分のお金をかき集めても必要な資金の半分にしかならず、途方に暮れ、理事長に相談に行きました。その時、私は、この起業にかける想いを必死に伝えたのを覚えています。その想いに理事長が賛同してくれ、残りの資金を出していただけることになったのです。理事長には、今でも仕事上の様々な相談に乗っていただいています。

●起業後、どのようなことにご苦労されましたか。

起業当初は赤字が続き、資金繰りで非常に苦労しました。自分の想いを様々な人に支えていただいて起業することができたわけですから、そう簡単に諦めるわけにはいきません。

銀行の融資を得るため必死にプレゼンを行いました。当時は、経済連携協定（EPA）に基づき、海外からの介護・看護分野の労働者の受入れが始まったばかりで、外国人の介護士・看護師というカテゴリにスポットが当てられたことも幸いし、何とか融資を勝ち取ることができました。

でも、それ以上に苦労したのは、受入れ施設側の外国人に対する偏見です。どうしても外国人の仕事に対する理解がなく、「安かろう、悪かろう」というイメージがついているのです。私はそのイメージを払しょくするため、介護職に興味を示している外国人の方を対象に職業訓練を行っています。それは、外国人の方を単に紹介するのではなく、介護の現場に能力のある外国人の方を派遣することで、関わる全ての方に喜んでいただきたいからです。ですから、本当に介護職に向いていると確信できる人を施設に派遣するようにしています。



職業訓練の様子



介護施設で働くスタッフ

しかし、自分の自信とは裏腹に、当初、現場の反応は冷たいものでした。外国人というだけで門前払いするところもあれば、読み書きに難があるというだけで拒否するところもあります。

そんなときは、「一度、彼女らの働きぶりを見てください」と私が施設に出向いてお願いをしています。介護の現場で日々の記録をつけることは、非常に大切なことですが、日本語を書くことができない外国人には、日本人の同僚がサポートして下さればカバーできます。実際の彼女らの仕事ぶり、彼女らの介護に対する情熱を見てもらうことで現場の方々に納得してもらうことができたという事例はたくさんあります。派遣された外国人の方々も、自分たちが当初施設側に受け入れられていないかもしれないという不安を感じているため、自

己の不安を感じているため、自

分を施設の一員として認めてもらおうと、他の人以上に一生懸命働くのです。すると自然に日本人のスタッフとも打ち解けていきます。派遣された外国人の方々も大変やりがいがあるようで、毎日笑顔で施設に足を運んでいます。

一度受け入れてくれた施設はその後も継続して受け入れてくれています。しかも、今まで施設側のご利用者様からのクレームは一度もありません。中には、当社のスタッフが派遣先の施設に正規雇用されるケースもあります。

当社としては、「また新しい有能な方を見つけなければ…」と思いますが、大変喜ばしいことだと満面の笑みで送り出しています。

●今後のアクションについて、どのようなビジョンをお持ちですか。

現在、日本語学校と連携して、介護士を目指している外国人留学生が介護施設で働くためのお手伝いも行っています。ゆくゆくは介護の面だけでなく、福祉施設の中の他分野、例えば、施設の中で食事を作る仕事といったところにもこの派遣というシステムを活かしていきたいと考えています。能力のある人が、単なる国籍のためにその能力を発揮できていないのであれば、「アクションの順番!」。そんな会社になりたいです。日本人は国籍にこだわりがちですが、分野によっては、そのこだわりを捨てていかないと将来危うい状況になることが目に見えています。

今後は日本においても人種の区別というものはなくなっていくと思います。というより、なくしていかないと労働力人口の急減に対応できません。それは、介護の世界でも、ものづくりの世界でも言えることではないでしょうか。私は日本が大好きです。「大好きだからこそ日本の良いところを外国人に伝えたい。日本に住み、日本で働きたいと考えている外国人の方々のサポートを行い、希望する仕事で働いてもらうことによって、より日本という国を好きになってもらいたい。」これが私の願いです。

<取材後記>

「お幸せに」、「幸せな人生を」、結婚披露宴などで度々繰り返されるお祝いの言葉。

でも、「どうしたら幸せになれるのか」、その方法は誰も教えてくれない。

今回の取材を通じて、元地社長の生き方の中に、そのヒントを見つけたような気がする。

それは、人は、「自分」や「自分だけ」が幸せになろうと思っても、絶対に幸せにはなれないということだ。

だから、彼女は、他者（外国人）が幸福になれるよう積極的に関わり、その笑顔の先に自分の幸せを見つけた。

「人生の良き伴侶の幸せに関わることで自分も幸せになる」、これが結婚披露宴で交わされるお祝いの言葉の真理なのかも知れない。

掲載している情報は、平成 25 年 10 月時点のものです。